

研究論文

語りの達成における思考・発話の提示

甲田直美 (東北大学)

本稿では、思考・発話を提示することが相互行為としての語りの達成にどのように関わるかを考察した。語り者のクライマックスに思考・発話を提示することが臨場感をもたらす、受け手の反応を呼び、語りの達成へ導いていた。語り手と受け手が協働して達成するものであり、語り手による一方的な構成物ではない。語りの達成に提携するためには、受け手は、語り者がクライマックスに達し、語り者が最終に向かう箇所を正しく捉える必要がある。会話における語りの中で、クライマックスを顕在化するために、思考・発話の提示という装置がどのように用いられているかを考察した。引用された思考・発話の持つ表現の直接性や補文内容の描写のきめの細かさ等の言語的特徴に加え、ピッチの切り替え、発話速度等の音声特徴、身体動作まで含めたマルチモーダルな要素によって顕在化は行われていた。これらの語り者のデザイン特性によって、思考・発話の提示は、語られた内容の再現性を高め、語り部分の受け手が情報に直接アクセスできる環境を提供する。思考・発話を語り者のクライマックスに配置するというアプローチは、語り手と受け手が当時の現場を共有し、語りを協働で最終へ導く一の手続きを示した。

キーワード：語り、思考の提示、発話の提示、相互行為、会話分析

Using Reported Thought and Speech to Enhance a Story

Naomi Koda (Tohoku University)

This paper looks at how incorporating thought and speech in a story helps to achieve effective storytelling. Incorporating thought and speech in the climax of a story brings the listener closer to the story, invites the listener's reaction, and contributes to the effectiveness of the story. Storytelling involves the interaction of both the teller and the listener; it is not merely constructed by the teller. For the story to be effective, the listener needs to be able to recognize the climax of the story and how the story will approach its end. This study looked at how thought and speech is used to allow the recognition of the climax of stories in conversation. Along with the verbal aspects of thought and speech, multimodal aspects, such as pitch, speed, and use of gesture, were also found to contribute. The use of these techniques were found to enhance the story and give more information to the listener. In conclusion, from our study we could see how the use of thought and speech in the climax of a story encourages the participation of both the listener and the teller, and leads them together to the end of the story.

Key words: storytelling, reported thought, interaction, conversation analysis

1. はじめに

会話分析(CA)研究者によれば、語りは、原則として話のかたまり(block of talk)などではない(Jefferson, 1978, p. 245)。会話内で語り話が話されることは「達成」と捉えられ、データは、どのように話話者によって完成されたかが調べられる(Mandelbaum, 1987, p. 148)。

2004等)。

語り部分の受け手による相づち、短い叙述、明確化要求などの back-channel (Yngve, 1970; Duncan, 1974)は、語り手がフロアを支持していることを示す (Edelsky, 1981)といえる。これと対照的に、相づちなど back-channelとは異なり、語り手が語り内的事件を語る場合や、受け手がその語りの終結を受領する時に自らのスタンスを明示する場合には具体的な表現を用いるが、これを実質的発話とよぶ。

ここでは受け手Aによる応答04は形容詞語幹の短い評価「うわ、え、やば」を扱むが、その短さや抑止さやさ声に近い声質から、実質的ターン交替は保留され、まだ話者Bがフロアを取っており、受け手Aは語りはまだ終わっていないと見なしていることがわかる。

このような実質的発話量の偏りは「語り手が継続してフロアを占め、語りが進行中である」という受け手の理解を表示し、構造的にも語りの行為の非対称 (Stivers, 2008, p. 34)を支持する。しかし、05「なんか()左三分の一角」以降の段階を踏んだ話のオチ「占い何位か分かんないとかhh言ってhh」で笑いととも提示される発話において、主動詞「言って」が発話される前に受け手Aは06で笑いを重ね、共鳴を示す。

05の発話は、単に「テレビが落ちて困った」と語るのではなく、その「困った」内容が「テレビ番組での占いを表示する時に見たい部分が分からないう」という内容を引用動詞「言って」によって具体的に提示している。この被書内容の提示部分(発話05の後半「そう()それだなんか()占い何位か分かんないとか[hh言って]hh)は具体的なありつつも、震災でテレビが落ちて壊れた結果としては、生活に必須ではない些細な被害をおもしろおかしく取り上げている。この部分は内容的にこの語りのオチを担っており、この語りの一番の盛り上がりとなっている。語り手Bが自ら笑いながら語っていること、この語りの部分の盛り上がりを示している。語り手自らが笑いと共に発話を提示することにより、そこがおもしろみのある部分であるという語り手の態度を表明し、語りにおけるこの部分の位置づけを

本稿では思考・発話を提示することが相互行為としての語りの達成にどのように関わるかを考察する。議論の出発点として、発話の引用が語り内で提示され、実質的発話交換が生じる現象を次の断片(1)で示す。

断片(1)は、東日本大震災に関する友人同士の会話であるが、01から05の発話においてもっぱら話者Bが先輩の家のテレビが地震で落ちて壊れた話を語っている(転記記号については章末に示す。→は注目行、**枠囲い**は実質的発話交換が生じる直前の発話を指す。以下の抜粋も同様とする)。

断片(1)

01 B: だいたいよぶだよぶ()でもなんか()先輩の家とか;

02 A: うん。

03 B: テレビが落ちおこっちゃって。

04 A: うわ: [えやば] ((さやき声に近い))

05→B: [なんか()]左三分の一角真つ暗になっちゃって; そう()それだなんか()占い何位か分かんないとか [hh言って] hh

06 A: [hhhhhhhh] いやいやもつと悩むところあるでしょhhh

07 B: もつとひどいのは: ()その知り合いで: 買い換えた日に地震で:

08 A: え::

09 B: あの地デジにしたのね。(DS800007)

開始部分01「なんか〜とか」は誰か話を伝えるかを配置する環境を提供し、これから語るといふ行為を投射する。01「でもなんか」以降の話題の提示の受領が、02「うん」で示され、語りの開始が承認される。語りの開始と受領は語り手と語り部分の受け手によって協働で達成される。語り部分は一人の話者が續けて長いターンを話したため、通常の会話から物語に移行するには、話者交替システム(Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974)を停止させ、拡大されたターンのフロアを得る必要がある (Sacks, 1974; Jefferson, 1978; Mandelbaum, 1987; Sacks, 1992; 申田, 1999; 山田, 1999; 高梨・竹内・森本・伊佐原,

示している。本稿では、05のような語りの展開における頂点をクライマックスとよぶ。このことは、受け手の反応として05の後半に重ねられる受け手Aの笑いとそれに続く実質的発話06によって確認できる。

受け手Aは笑いの後、06「いやいやもつと悩むところあるでしょ」という実質的発話によるつっこみ(オチの受領)を入れる。この発話は語られた内容への「正しい」つっこみであり、この受け手による反応から、語りの価値が「適正に」受け入れられたことが明確になり、語り手は次の語りへ移行することを受け手が適正にオチを承認しつっこみを入れたことは、受け手がこの直前の語りが終結に向かっていることを理解したことと現れるととれる。本稿で06の発話を実質的発話と判断したのは、このように内実(情報)としての伝達内容：この場合、つっこみとして機能している)を持ち、多くの場合、それに対する次の反応(この場合、次の話題の開始)が見られるからである。

受け手による適正なオチの承認によって、この語りは終結する。この語りがいったん終結することは、程度を強める程度副詞を伴った表現07「もつとひどいのは」によって、話者Bの語りに区切りが付き、さらなる語りが継続することと分かる。次の語りの開始は語りに区切りが付いたという認識を語り手Bと受け手Aが共有したことに基づいている。語りの開始と同様、語りの終結も協働して達成される。06の発話は、これまで実質的発話をしていなかった受け手が実質的発話を開始した時点であり、そのことは、この前の発話05において、受け手Aが発話を開始するきっかけになるような時点が訪れた可能性を表している。

本稿では、語り部分の受け手が実質的発話を開始した時点で着目し、どのような発話後に実質的発話者交替が行われているかを観察する。以下で述べるような思考・発話の提示が語りのクライマックスに置かれると、受け手の実質的発話の呼び水となりやすいことを見る。そして実際に受け手が断片(1)のように、適正な反応をすることで語りが協働で終了し持ち込まれることを観察する。

2. 思考・発話の提示

クライマックスにおいて、受け手は、これ以上話が継続するかどうかを判断しなければならぬ。相手の語りを聞き、スムーズに自分の発話を開始する際には、進行中の相手の発話がまだ展開するのがあるいは終結しようなのかを判断されている。この判断の現れとして、語り部分の受け手が実質的発話を開始した時点で注目する。

断片(1)では「05 占い何位か分かんないとか [hh 言って] hh」と発話が提示され、それに受け手が共鳴して笑いを共有し、その後語り部分の受け手による実質的発話が開始されていた。語り部分の受け手が実質的発話を開始した時点には、語り手による発話量の偏りである、フロアが終了するという受け手の理解が示されている。05の発話は、語りのクライマックスの位置で思考・発話の提示がなされることがあり、これによって受け手の反応(実質的発話)が誘発されていると考えられる。

会話内において思考または発話を引用して提示することがfootingのシフトを表すデザイン(Holt, 2007, p. 49)として用いられることがこれまでの会話分析的研究によって指摘されていた。引用を用いるとき、語り手は自ら選択した言葉や自らの見解としてではなく、ある発話の映し手(animator)としての役割(Goffman, 1981; 甲田, 2006)にシフトしている。例えばLerner(1992, pp. 267-268)では、語りの初めと終わりが引用形式でマークされ、境界設定されている例を論じている。日本語では山本(2013)が物語の内容を知らないはずの受け手が発話の引用によって参入する事例を論じている。Holt(2000, p. 435)は、直接話法による発話の引用が、不平等や楽しい出来事クライマックスの部分で用いられることを指摘している(Holt, 2000, p. 437)。ここでは語り手が、自身が憤慨した「非難されるべき発話」を直接話法で提示することにより、客観的に見えるやり方で説明しつつも、話者の発話内容への態度を含むものであるため、これが受け手の反応を誘う(Holt, 2000, p. 438)ことが指摘されている。このように直接引用が連鎖上の特定の位置、クライマックス

で頻繁に生じ、受け手の反応が生じるという観察は重要なものである。直接引用それ自体の観察に加え、発話連鎖上の位置から直接引用の機能を説明すること、引用の持つ相互行為上の機能が説明できる可能性があるからである。

本稿で思考の提示と発話の提示の両方を一括して扱うのは、従来の研究、特に英語を対象にした研究において発話の引用についての研究が多く見られるが、日本語の会話において、思考・発話の提示と語りの終結がそれぞれどう関わっているのか、全体的に見通しを得るためである。また、思考と発話は補文構造をとる点で共通しており、補文内容が実際に発話されたものかどうかは必ずしも明確ではない(Haakana, 2007)。本稿以下で述べるように疑似引用という当時の状況を引用に擬した形で形容する場合も存在する。

さらに従来の研究のように引用を提示すると話者が交替する(Holt, 2000)という指摘に加え、思考・発話を提示することの何が実質的発話者交替を引き起こしているかを知るためには、補文の表現性全体を観察する必要がある。またHolt(2000)で取られる事例(不平と笑い話)以外にも広く事例を収集し観察する必要がある。これらの研究では、語りに着目し、相互行為としての語りが達成される(あるいは達成されない)プロセス、語りの達成における思考・発話提示の役割についての踏み込んだ分析がなされているわけではない。さらには、日本語の特徴として、発話・思考の引用における主動詞(思う、言う)と補文との位置関係が英語等とは異なり、日本語の発話連鎖において思考・発話の引用がどのように提示され、どう用いられているのかが明らかになっていないと言えない。

また言語的特性のみならず音声特徴まで含めた包括的な枠組みの下で語りの達成がどのように実現されるかを観察する必要がある。語られた当時の再現であることは、プロソディーや声質の変化、話の前置きといった連鎖上の要素(Cliff & Holt, 2007, p. 12)やピッチのリセット(Couper-Kuhlen, 2007, pp. 108-109)といった、受け手に認識可能な言語的、パラ言語的資源を組み込んだ複数のデザイン特性の総体で実現

される。このため、語られた再現がどのように認識・共有されるかの過程についての踏み込んだ分析が必要となる。

語りのクライマックスがどのように受け手に認識され受け入れられるのか、そしてどのように語り手と受け手によって終結が共有され、話者交替システムが再作動するのだろうか、語りのクライマックスを顕在化するために、思考・発話の提示が終結の認識可能性を高める装置となっていることを論じる。本稿では、語りのクライマックスに思考・発話の提示を配置することが受け手の反応を呼び、語りの行為の非対称が解消される現象をとりあげる。語りを協働で達成するひとつの手続きとして思考・発話の提示が用いられることを示す。

3. データ

1組2名から3名、計8組による会話(話者の平均年齢21歳、年齢幅19-32歳)合計518分(8時間38分)。うち2組は自由会話(雑談)、6組は2011年3月に発生した東日本大震災の体験談と雑談を含む会話である。防音室でICレコーダーとビデオカメラによる録画・録音が行われた。収録は2011年6月から7月に行われた。話者は仙台市在住で地震を経験しているものの、終始笑い興味を持った会話²⁾で、自然な友人同士の会話であった。話者は体験やそこから思いついたことを相互作用の中で自由に語り、食べ物好みや自炊生活など、話題が発展していく様子を含んだものである。語りの構造を判断するために、やりとりの中で語り部分を取り出し、受け手の発話抑制(相づち等にとどまり、実質的発話を話さない)という観点を聞いた。語り部分について、本稿のデータはインタビュアーの役割が固定した非対称的会話ではないため、自発的談話内での語り

第1の語り01～07は、話者Bが避難所で見聞きした状況を語ったもので、避難所で待機している子供が、親が迎えに来て、夜9時になってやると親が迎えに来た場面を語っている。この間、実質的発話を語るのBで、それに対してAはもっぱら受け手に回り、「そ:」「ね:」「ね:」等の受領や共感を表す短い表現、「そうなの?」と驚きを表明するのみで実質的発話はない。Bの語りには言葉探しのスロットとしての「なんか?」や、終助詞の音の引き延ばし(「さ:」)等、継続意思が示されている。05は当時の状況を発話で直接提示し、これに受け手は「そうなの?」と驚きと共に重複させるが語り手は語り続け、そして、この語りは「すごいさびしくなった」と体験時の感情を表す言葉で終了する。この部分05は発話の提示だが受け手Aは驚きを見せるものの、最終志向する発話とはなっていない。

第2の語り08～11では、この言葉の後、これまでに受け手に回っていた話者Aが「うんうんうん」の後、逆接接続詞「けど」に続いて自らの避難所の体験を対比的に導入し、話し始める。話者Aが特に準備もせずに避難所へ避難したが、他の人は毛布を持ってきた状態が語られる。この08における受領の仕方は「うんうんうん」の後すぐに自らの体験を続けている。ここでの受領の仕方は、07での体験時の感情への反応としては短いように思えるが、(相手が語る)避難所の様子に自らの避難所の様子を続けるもので、共通した同様の語りを連鎖させることで語りの理解を示している。続く10「え()ちよつとこつちく何も>持たず[]に來ちやつたらやましい」なっと思って思つたは、当時の心内発話を引用しており、抽象的な表現とは置換不可能な再現性を得ている。これに重複するように受け手が共鳴し、語りを終了する。

第3の語り12～17では、この後、これまで受け手であったBが思考内容に共鳴して反応した後、「でもね毛布も少ないし」と実質的発話を始める。このBによる発話は、添加を表す接続詞を表す「あと」や「で:」によって続けられる。「水道出るからもらえないし」によって続けられる。「水道出るから受け手に回っていたAは「ちよつとね:良心が痛んで

実質的発話の連続上の現象として語り手が語りを伝えるのに成功したかを観察することが可能になる。本研究では、会話分析から語ることを達成として考え、相互行為上の現象として受け手の反応から語りの諸要素を浮かび上がらせた。

4.1 語りの構成要素

次は震災の際に仙台市内の避難所で経験した内容が話者AとBによって語られている場面である。断片(2)には、本稿で認定する3つの語りが含まれており、開始部分～継続部分～終結部という語りの構成要素(Mandelbaum, 2003, p. 611)が定期的に現れている。

断片(2)
 01→B : なんかに()すごいその日()金曜日の9時からいに [なつて] 来る人とかもいもし =
 02 A : [そ:]
 03 B : = さ: 大変、なんか-
 04 A : ね:
 05 B : なになにに()くんのお母さん() [いらつしや] =
 06 A : [そうなの?]
 B : = いまますか: ?
 07→B : すごいさびしくなった。
 08→A : うんうんうん、けど夜に避難してくる人とかなに()夕方くらいに避難する人みんなめつちや毛布とが持ってきてて [寝袋とか、] [うんうん、]
 09 B : [うんうん、]
 10→A : え()ちよつとこつちく何も>持たず [] [來ちやつたらやましい] なつて思つた。
 11 B : [hhhhhhhhhhhhhhhhhhhhh] 失敗
 12→B : でもね毛布も少ないし、あと水(05)あての保存水? [とかも] けつこうあつたんだけど-
 14 A : [うんうん、]
 15→B : で: うち水道出るから [もらえない] し() =
 16 A : [まそう-]
 17→B : [= つつて思つて: hhhhh]
 18 A : [ちよつとね: 良心が痛んでね:] なんかに
 19 B : [[さすがにもらえない]]
 20 B : うん、かわいそすぎます。(DS800007)

図2 実質的発話交換場面における思考・発話および疑似引用：全体の42%を占める

図2 実質的発話交換場面における思考・発話および疑似引用：全体の42%を占める

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

表1 実質的発話交換場面に用いられた思考・発話動詞

思考・発話動詞	回数
言う	8
思う	45
聞く	1
話をする	1
つて	5
計	60

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

図1 実質的発話交換が生じる直前の発話 (全208例中60例が思考・発話)

ね」と実質的発話を再開する。

以上の観察から, Mandelbaum (2003, p. 611)による語りの開始部分～継続部分～終結部の3つのパートのうち, 彼女のいう終結部を③と④に独立させて⑥にまとめる。

(i) 語りの構成

- ①語りの開始部
- ②語り継続部
- ③語りの終了を予測させる発話
- ④受け手による語りの受領表示

Mandelbaum (2003, p. 611)では語り手による語り①～③と受け手による受領④が指摘され, 以下のよう整理されている。①語りの開始部で, 語り手がこれから語りを開始することを表示し, 受け手が承認した場合, 語り手は②語りを継続する。そしてその後, ③語り手が語りの終了を予測可能にする発話を提示し, 受け手が③に反応し, 終結を志向した発話をする(④)ことで語りは終結する。

語り部分では一人の語り手が一定期間実質的ターンを占める。語り手と受け手は開始・継続・終了のために, 通常のターン交替を協調して再配分する。(i)で示した語りの構成①～④が成立するためには, 語り手と受け手双方が提携(Mandelbaum, 1993, pp. 252-253)している。「語り手が能動的であり受け手が受動的という見方」に対して語り手と受け手の両方が語りの開始, 持続, 終了において能動的である(Mandelbaum, 1993, p. 252; Sacks, 1974)。

①～④を実質的発話量の幅から特徴付けると, ①で受け手は実質的発話の抑制を開始し, ②以降, 受け手の実質的発話は抑制される(語りの行為の非対称(Sтивeрс, 2008, p. 34))。③のクライマックスの位置に語り手が感情, 描写のきめの細かさなどを配置することによって, 語り手が終了へ近づきつつあることを認識可能になる。これまで実質的発話を控えていた受け手が, ③に反応し, 実質的発話を開始する。

語りの構成を断片②の第1の語りの発話番号と共に示す。

受け手の実質的発話の抑制(開始部分)①: 発話番号01)については, これからの語り手がターン交替の一時の停止を開始し, より拡大されたターンを得る権利を得る。誰でも単に語りを開始できるのではない。語りの開始は, 相互作用によってもたらされる。これからの語り手は何か語ることがある示唆を提示し, 受け手は語りを進めるか進めないかを選ぶ(02)。こうして語りの開始は, 協調して達成(Mandelbaum, 1993, pp. 252-253)される。

語り継続部(②: 03-05)では, 語り手が継続してフロアを占め, 語りが進行中であるという理解を受け手は表示しており, 語りの行為の構造的非対称(Stivers, 2008; Jefferson, 1978; 山田, 1999; 串田, 1999)を支える。受け手は実質的発話を控え, もっぱら受け手に回るが, ある時点(語りの終了を予測させる発話(③: 07))を過ぎた後, 受け手はこれまでの語りにふさわしい理解を示す(④語りの受領: 08)。この③の時点とは, 断片②においては, それぞれ(ii)の発話である。この発話の後に語り部分の受け手は実質的発話を開始しており, ③の発話には受け手の反応を引き起こす, すなわち終結を予測させる要因があると考えられる。このことは, 受け手が終結を志向した表現④を行うことで分かる。また, ③は, ④で語り部分の受け手が実質的発話を開始するという点で, フロアを占める語り手としての地位が終了する時点であるといえる。このことを語り手性の終了と捉える。

(ii) 断片②における③語りの終了を予測させる発話

第1の語り: 01B～07B: すこいさびしくなった。
第2の語り: 08A～11A: え()ちよつとこつち何も持たずに来ちゃったうらやましいない思つた。
第3の語り: 12B～17B: で:うち水道出るからもらえないし()つて思つてhhhhh

(ii)で, 第2, 第3の語りにおける発話は, 当時の感情や思考を提示し, 語り途中の事情説明や事象叙述とは異なる性格を持つている。このような感情や思考の提示が受け手の共感や反応を呼び, 受け手の反応を引き出していると考えられる。第2, 第3の語

りにおいては, 当時の思考を「え()ちよつとこつち」もらえないし()つて」と, ダイキシスや終助詞を含む具体的表現となつている。提示された状況への直接的接近のみならず, 語り手の態度表明が詳らかにされることも受け手の実質的発話を誘発する。抜粋②の第2の語りで言えば, 当時の再現とともに話者の驚きというスタンスが実演されているのである。

語りの完結では語り手の受け手の内容への理解と正しい評価を示す(Lerner, 1992)必要がある。語りの達成に提携するためには, 受け手は語り手性の終結箇所を正しく捉える必要がある。状況描写の後の感情の提示や, 詳細でリアルな描写性の高まりなど, 語りに重要なクライマックスが生じることによつて語り手性の終結についての予測を高めること考えられる。この部分を認識可能にするものとして, 思考・発話の提示が用いられる。断片②の第2, 第3の語りの終結のように, 思考内容を直接提示して見せることは, 受け手にも認識可能なマークとして具体性を帯びた表現として用いられる。

4.2 クライマックスの共有から終結へ

語りには単なる事実の報告ではなく, その意味するところ, 顕著さ(high point)を伝えるものである(Labov & Waletzky, 1967; Labov, 1972)ため, クライマックスにおける受け手の適切な反応は語りの達成にとつて重要な意味を持つ。クライマックスは語りを迎えることと語りは終結を予期させることとなる。前置きや状況説明の後にクライマックスが受け手に認識可能な形で提示されることにより, 語りを協調して終結へ導く下地ができる。語ることは単なる情報伝達ではなく, 語る内容の価値や意義を伝え, 共有することであるため, クライマックスを迎えることと語りの最重要部分が提示されたことになり, 終結を予期させるからである。

このため, 語りのクライマックスが受け手に適正に扱われない場合, 語り手はクライマックスを繰り返し提示することがある。

次の断片では, 語りのクライマックスにふさわしい反応が得られずに語り手はクライマックスを再度提示する。

断片③

- 01 A: →やつてあは:あ()あまあ研究機材が壊れた話とかh
- 02 B: あ: […]
- 03 A: [一台] 数千万hhするとか:そういういの()やつぱり:知り合いに()その人は理学部の院生なんですけ […]
- 04 B: [はい。]
- 05 →A: 確か地震:直後?()研究室にいて:()まあ(1.0)あれらしいですね()研究生が: hその機材だけは壊すなつて言つて。
- 06 B: うん。
- 07 →A: その一番高い機材だけは死守しろつていう。h
- 08 (1.0)
- 09 →A: なんかも地震揺れても()そんな話とか()聞きましたけどね。
- 10 B: そ:(2.0)どうも高い機材一個:ぐらいあまり[すか]らね。
- 11 A: [うん。] (DS800006)

語りの終結部における「聞く」は208例中, これが唯一の例である。Aは「地震で大きな揺れの中を, 大学の研究機材を死守しなければならなかつた話」の概要を05の発話ではほぼ語っている。しかし, それに対する受け手Bの反応は06「うん」だけであり, 驚きや共感には示されない。その後, 05の「壊すなつて言つて」と同趣旨ではあるが, 強調した表現07「その一番高い機材だけは死守しろつていう」を繰り返す。そこでも受け手Bの反応はなく, Aは少しの間の後, 続けて, 「なんか地震揺れても()そんな話とか()聞きましたけどね」(09)と言つて, 語りを終了するのである。受け手に終結が受け入れられるよう, 終助詞を伴い文法的に完結した形に換えて提示している。この後Bは実質的発話を始める。

Jefferson (1978, p. 244)は, 「語り手は, 物語を完結させるとき, 受け手の反応を求めることに従事する」と述べている。Aが語るエピソードは, 05の時点で内容的には完結しているともとれる。しかし, 受け手の反応が得られなため, 反応の呼び水

としようとして、もう一度強調し繰り返すことで、語りの盛り上がりを見せ、受け手の反応を求め、それでも反応がなかったため、語りを終了するため手段として、「09 そんな話を聞きましたね」と語りから一歩距離を置き、情報源を再度提示する。形式としても終了を意図する動詞の終了形式「聞きました」と「けだね」を付加し、補足的に付け足す。語りを終了するためには、最終的なデザインを変更し再度提示してまでも受け手の適切な受領を得る必要がある。

このように、語りを終了するためには、受け手の反応は必須のものとなる。受け手が、語りの位置づけを正しく(意図されたように)理解し、その話が何だっかを示すことで非常に重要な話だという理解を示すことであり非常に重要である。もし受け手が、語りの可能な終わりであり、何も言わないうか、終了にふさわしい反応を見せない場合には、語りを終了に持ち込むために、語り手は再び終了を提示し、それをを用いて受け手が終了の受領を示せるような連鎖を提供する(Mandelbaum, 1993, p. 253)。このように、ずっと、語りは基本的に相互作用的である。語り手と受け手は語り手は語りの開始、維持、クライマックスから終了までを協働して達成する。物語を語ることは、一定の「参与の枠組」のなかで、語り手および受け手により協働で達成される(Goodwin, 1984)。

5. 被引用部の声の重要性

これまで見てきたように、語り手は、過去に起こった出来事や状況や経緯を語る途中で、当時の思考や発話を、それが実際に生じたかどうかにかかわらず、語られた場面の臨場性をもった生き生きとした感情や発話で演じていることがある。このような思考・発話の提示がどのように顕在化され、終結を予期させる装置となっているのか、補文の表現特性を音声的特徴、身体動作を含めたマルチモーダルな観点から示す。

5.1 受け手に「示す」ための装置

思考・発話を説明や解釈で含むことなしに、受け手に直接指示することによって、受け手は語り内での事象を直接、体験的に解釈する余地を与えられる。

10→A: え()ちよつとことちよつと何も>h持hたhまは
[に來ちやたうらやましい]なつて思つた。
11 B: [hhhhhhhhhhhhhhhhhhhhhh]失敗

話者Aによる思考の提示は、これから思考内容が語られる開始時点が感動詞「え」によってマークされている。感動詞「え」によって、想定していたことから現実がはずれていない(Havashi, 2009) すなわち荷物を持たないで避難したが他の人はみんな毛布や寝袋を持ってきていたことが、直面した当時の心境から描かれる。

Couper-Kuhlen (2007, p. 109) では、英語において、思考動詞「I thought」の後でのポーズによるくびれやピッチのリセットというプロソディ上のフォーアマットによって、思考内容を語る視点が表し分けられていることを指摘している。ピッチの切り替えがない場合には、間接的に発話時の視点から報告されているが、切り替えがある場合には、場面に基いた異なる「声」を描写していることとされる。

図3は抜粋(2)における「(みんななつちや毛布)とか持たててきて寝袋とか、え()ちよつとことちよつと」

<何も>持たず[に來ちやたうらやましい]なつて思つた。」のピッチ曲線である。

状況の説明「(みんななつちや毛布)とか持たてて寝袋とか。」の後、当時の思考内容を示す時点(「え()ちよつと」)でピッチの切り替えが生じている。発話未述語「來ちやつた」までピッチは上がり、当時の心情が提示される。補文は、事象の説明部分とは異なるイントネーションをもち、現在の発話時とは別の、当時の思考がドラマ的に再現されている。本稿の日本語における観察では、補文開始時点でのピッチの切り替え、具体的には高ピッチでのスタートによって補文の境界が示されている。音声手段によって引用の境界を示すことが両言語とも重要なことであると考えられる。英語では引用の主動詞は補文より前に位置するが日本語では主動詞後置のため、引用の開始は英語よりも明確でなくなる。このため、開始位置の指定のためのリソースとして、このようなプロソディ上のシフトが重要となる。補文の境界は、ピッチに加え、話速にも支えられている。表2は、おおよそ分節相当とイントネーション単位で区切った場合の、持続時間と話速を表

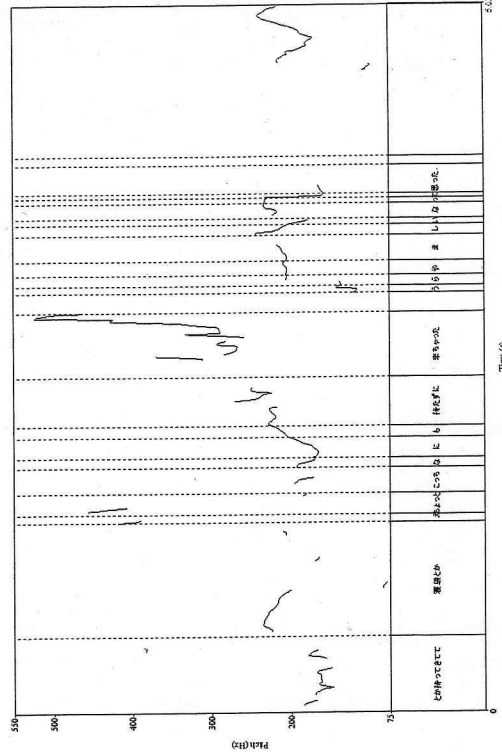


図3 抜粋(2)08-10のピッチ曲線

とは漸次的に予測を強めると思われる。開始位置についてこの時点で発話を開始できたのは予測による役割があるが、受け手は予測のできる箇所ですべて発話を開始できるのではなく、語りの受領としてふさわしい箇所を見極め、反応している。そのためには当時の思考のリアルな再理が開始されたというようにピッチの切り替えが起っていることも語り内でのクライマックスの顕在化に貢献している。

【参考文献】

Clift, Rebecca, & Holt, Elizabeth (2007). Introduction. In Holt, Elizabeth & Clift, Rebecca (Eds.), *Reported talk: Reported speech in interaction*. pp. 1-15. Cambridge: Cambridge University Press.

Couper-Kuhlen, Elizabeth (2007). Assessing & accounting. In Holt, Elizabeth & Clift, Rebecca (Eds.), *Reported talk: Reported speech in interaction*. pp. 81-119. Cambridge: Cambridge University Press.

Duncan, Starkey, Jr. (1974). On the structure of speaker-auditor interaction during speaking turns. *Language in Society*, 2, 161-180.

Edelsky, Carole (1981). Who's got the floor? *Language in Society*, 10(3), 383-421.

根本美香・伝康晴 (2003). 3人会話における参与役割の交替に関する非言語行動の分析 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-A301, 25-30.

根本美香・伝康晴 (2011). 話し手の視線の向け先は次話者になるか. *社会言語科学*, 14(1), 97-109.

Goffman, Erving (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Goodwin, Charles (1984). Notes on story structure and the organization of participation. In Atkinson, Maxwell & Heritage, John (Eds.), *Structures of social action*, pp. 225-246. Cambridge: Cambridge University Press.

Goodwin, Marjorie Harness (1990). *He-said-she-said: Talk as social organization among black children*. Bloomington, IN: Indiana University Press.

Haakana, Markku (2007). Reported thought in complaint stories. In Holt, Elizabeth & Clift, Rebecca (Eds.), *Reported talk: Reported speech in interaction*. pp. 150-178. Cambridge: Cambridge University Press.

Hayashi, Makoto (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41(10), 2100-2129.

Holt, Elizabeth (2000). Reporting and reacting: Concurrent responses to reported speech. *Research on Language and Social Interaction*, 33(4), 425-454.

Holt, Elizabeth (2007). 'I'm eyeing your chop up mind': Reporting and enacting. In Holt, Elizabeth & Clift, Rebecca (Eds.), *Reported talk: Reported speech in interaction*. pp. 47-80. Cambridge: Cambridge University

sity Press.

Jefferson, Gail (1978). Sequential aspects of storytelling in conversation. In Schenkein, Jim (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction*, pp. 219-248. New York: Academic Press.

Jefferson, Gail (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, Gene H. (Ed.), *Conversation analysis: Studies from the first generation*, pp. 13-23. Philadelphia: John Benjamins.

甲田直美 (2013). 名詞修飾語による「語り」の終結—「みたいな」「っていう」の表現性と談話機能— 児玉一宏・小山哲春 (編) 言葉の創発と身体性, pp. 431-447. ひつじ書房

串田秀也 (1999). 共有知識と経験への橋—物語における参与の組織化の一面に関する試論— 大阪教育大学紀要第II部門, 47(2), 59-81.

串田秀也 (2006). 相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化— 世界思想社

Labov, William (1972). The transformation of experience in narrative syntax. In William Labov, *Language in the inner city*. Philadelphia, 354-396. PA: University of Pennsylvania Press.

Labov, William & Waletzky, Joshua (1967). Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In Helm, June (Ed.), *Essays on the verbal and visual arts*, pp. 12-44. Seattle, WA: University of Washington Press.

Lerner, Gene H. (1992). Assisted storytelling: Deploying shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology*, 15(3), 247-271.

Mandelbaum, Jenny (1987). Couples sharing stories. *Communication Quarterly*, 35, 144-170.

Mandelbaum, Jenny (1993). Assigning responsibility in conversational storytelling: The interactional construction of reality. *Text*, 13(2), 247-266.

Mandelbaum, Jenny (2003). How to "do things" with narrative: A communication perspective on narrative skill. In Greene, John O. & Burlinson, Brant R. (Eds.), *Handbook of communication and social interaction skills*, pp. 595-633. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Maynard, Senko K. (2005). Another conversation: Expressivity of Mitaina and inserted speech in Japanese discourse. *Journal of Pragmatics*, 37, 837-869.

西阪仰 (2003). 相互行為としての「伝聞」 言語, 32(7), 62-69.

西阪仰 (2008). 分散する身体—エスノメソッドロジ—的相互行為分析の展開— 勁草書房

Sacks, Harvey (1974). An analysis of the course of a Joke's telling in conversation. In Bauman, Richard & Sherzer, Joel (Eds.), *Explorations in the ethnography of speaking*, pp. 337-353. Cambridge, UK: Cambridge

University Press.

Sacks, Harvey (1978). Some technical considerations of a dirty joke. In Schenkein, Jim (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction*, pp. 249-270. New York: Academic Press.

Sacks, Harvey (1992). *Lectures on conversation*. Vol. 2. Oxford: Blackwell.

Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A., & Jefferson, Gale (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4), 696-735.

Schegloff, Emanuel A. (2000). On granularity. *Annual Review of Sociology*, 26, 715-720.

Stivers, Tanya (2008). Stance, alignment and affiliation during story telling: When nodding is a token of preliminary affiliation. *Research on Language in Social Interaction*, 41, 29-55.

高梨克也・榎本美香 (2009). 「聞き手行動から見たコミュニケーション」の編集にあたって 認知科学, 16(1), 5-11.

高梨克也・竹内和広・森本郁代・伊佐原均 (2004). 物語を介したコミュニケーションとしての独話— ことば工学研究会資料, 47-56.

Tannen, Deborah (1989). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.

Umiker-Sebeok, Jean, D. (1977). Preschool children's intraconversational narratives. *Journal of Child Language*, 6, 91-109.

山田富秋 (1999). 会話分析を始めよう 好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編) 会話分析への招待 pp. 1-35. 世界思想社

山本真理 (2013). 物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的展開— 社会言語科学, 16(1) 139-159.

Yngve, Victor H. (1970). On getting a word in edgewise. *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 6, 567-578.

(2013年12月20日受付)
(2014年10月9日修正版受付)
(2014年10月20日掲載決定)

【付録】転写記号

主な転写記号は次の通りである。Jefferson (2004) が開発し、西阪(2008)が日本語用に用いた転写方法に基づく。

連鎖

- [(複数の話し手の音声が重なっている場合の) 重なり(の始まり)
-] (複数の話し手の音声が重なっている場合の) 重なり(の終わり)
- [[二人の話し手が同時に話し始める
- = 二人の話し手の発話が途切れなく密着して起こること、一つの発話の中で話と話が途切れていないこと

間合い

- (L.2) 音声が途切れている時間 (括弧内の数字は秒数)
- (.) 0.2秒に満たない短い間合い
- 発話の表出上の特徴
- :: 音が引き延ばされている (数が多いほど長く引き延ばされている)
- 言葉が途中で途切れた
- . 語尾が下がって区切りがついたこと
- 。 イントネーションが続いていること
- ? 語尾の音が上がっていること
- h 呼気音
- h. 吸気音
- 語h語 語の中に呼気が含まれる
- 下線 音の強さは下線によって示される。
- 。 音が小さい
- ¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないが、笑い声でなされている場合
- >< 発話のスピードが目立って速くなる部分
- <> 発話のスピードが目立って遅くなる部分
- (()) その他の注記